

TOKUMA NOVELS

斎藤
栄

四国殺人遍路

書下し長篇旅情ミステリー





TOKUMA NOVELS

斎藤 栄

四国殺人遍路

発行者 松下武義

発行所 徳間書店

東京都港区東新橋一ノ二ノ一六 一〇五―八〇五五

電話〇三・三五七三・〇一一

振替〇〇一四〇一―四四二九二

© Sakae Saitô 2001 Printed in Japan

落丁・乱丁はおとりかえいたします

〈編集担当 吉川和利〉

ISBN4-19-850535-7

TOKUMA NOVELS

斎藤栄

四国殺人遍路

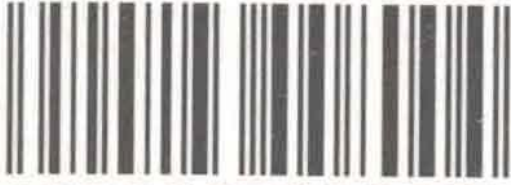
書下し長篇旅情ミステリー



ISBN4-19-850535-7

C0293 ¥800E (0)

定価： 本体 800円 + 税



1920293008004



しこくさつじんへんろ
四国殺人遍路

さいとう さかえ
斎藤 栄

一昨年は愛媛県内子^{うちこ}から宇和島。昨年は徳島、鳴門。そして今年、高知から伊予三島を経て松山を取材し、四国に並々ならぬ関心を寄せる氏。乱歩賞受賞作『殺人の棋譜』以来、著書は四百作を超え、新たな地平を切り拓く作品を、という情熱が本書に結実した。

TOKUMA NOVELS



書下し長篇旅情ミステリー

四国殺人遍路

斎藤 栄



徳間書店

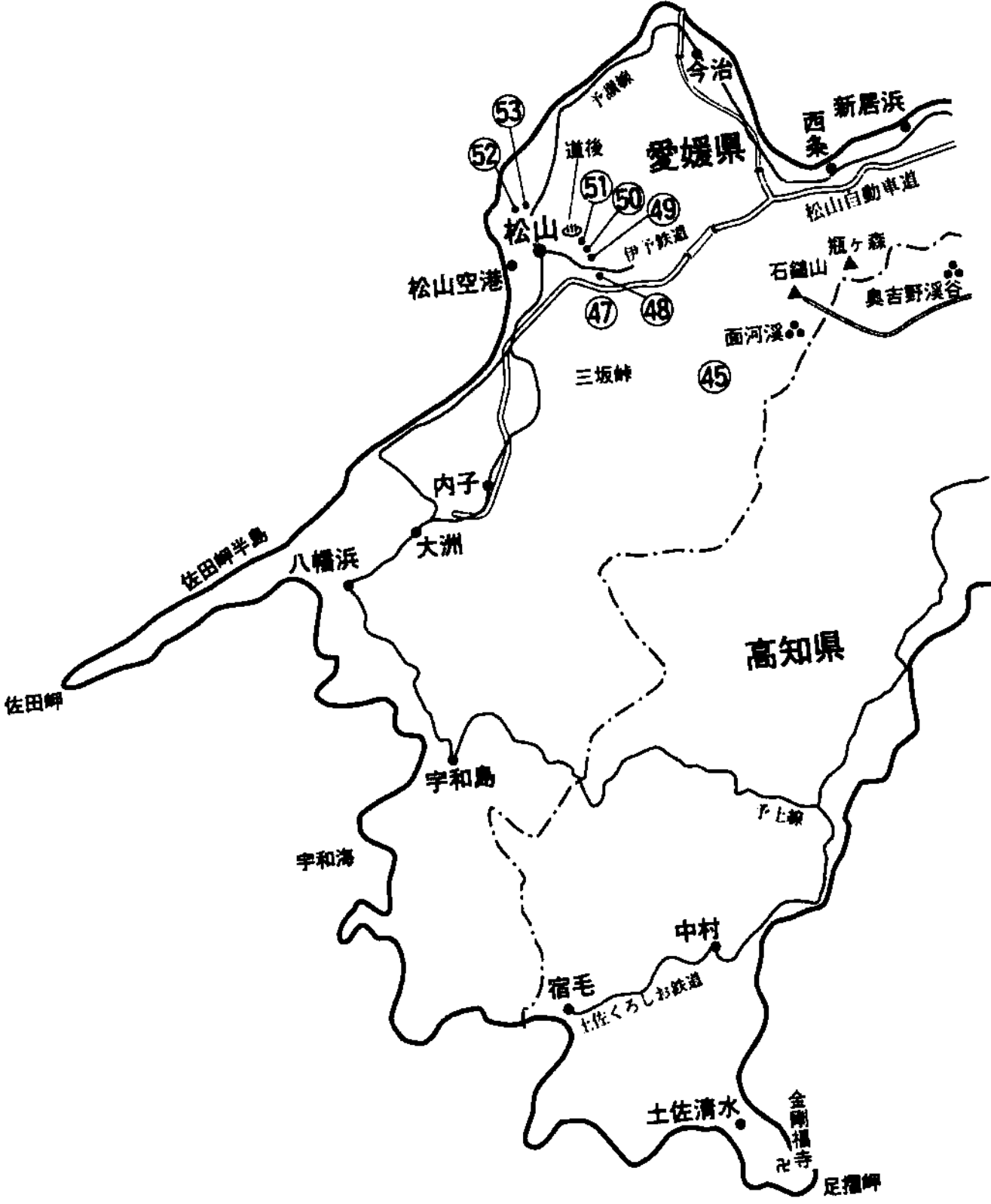
TOKUMA NOVELS

目次

第一章	ハート探偵局	9
第二章	四国の雨	39
第三章	徳島の遺体	68
第四章	アミダくじ	98
第五章	平成三島病院	127
第六章	高知の夜	163
第七章	夜明けの人々	192
第八章	万葉語の謎	208



- ①⑥ 観音寺
- ①⑦ 井戸寺
- ①⑧ 恩山寺
- ①⑨ 立江寺
- ②⑧ 大日寺
- ②⑨ 国分寺
- ③⑩ 善楽寺
- ④⑤ 岩屋寺
- ④⑦ 八坂寺
- ④⑧ 西林寺
- ④⑨ 浄土寺
- ⑤⑩ 繁多寺
- ⑤① 石手寺
- ⑤② 太山寺
- ⑤③ 円明寺



本文挿画・加藤孝雄

第一章 ハート探偵局

I

横浜市の中央部、JR関内駅の北口から程近いところに、YCビルというのがある。そこの二階に、最近、〈ハート探偵局〉というのが開業した。昨今の不況で、世の中が全体的な行き詰まりムー

ドに支配されると、この探偵という稼業がかえって繁盛^{はんじょう}してくる。いわゆる陰^{かげ}の情報をつかんで、それを利用しようとする人々がふえるためである。

この〈ハート探偵局〉も、その時流に乗じたものと言えるが、まったくの新規のものではなかった。

探偵局の構成員は、江戸川探偵長と尾瀬主任、それに瓜生美也子^{うりゆうみやこ}、明美^{あけみ}の姉妹あわせて四名。つい先

頃まで、軽井沢のレイクニュータウンのそばにある、
《こころ探偵事務所》で働いていた。ところが、あ
る事件を契機に、オーナーの井筒いづつとその妻が失踪し
てしまい、そこに遺言めいた言葉があった。

「私がいなくなった後は、横浜市内に移り、ハート
探偵局を開きなさい。その手続きはしてあります」
という趣旨だった。

詳しいことはわからなかったが、井筒オーナーに
忠実な江戸川探偵長は、その遺言めいた言葉に従い、
《ハート探偵局》を立ちあげたというわけだった。

もともと、警察庁の鉄道警察特捜隊に所属してい
た江戸川と尾瀬は、JRの駅近くの新事務所がすつ
かり気に入ってしまった。

江戸川は、その日の朝十時に、四人でのミーティ
ングを、こんなふうにして始めた。

「この場所は、みなとみらい21地区という横浜の新

しい中心市街地を背景に持ったビジネス街のど真ん
中です。だから、閑静な南軽井沢とは雰囲気も違
し、仕事の性質もおのずと違ってくる。わかるでし
ょう。だから、大切なのは、積極的な行動ですよ。

これまでも、軽井沢からどんどん、日本全国へ出
行ったけれど、それは出張という感じに過ぎなかつ
たと思うんです。これからは、日本各地に、うちの
支店を出すような気持でやりたいと考えています。
いいですね？……尾瀬主任、何か意見は？」

現実的なものの考え方をする尾瀬は、ニヤリと笑
った。近頃は、笑うと唇の端が持ちあがり、シニカ
ルな影が射すようになった。

「いや……江戸川さんに、そういう堂々たる見解を
発表されると、『おっしゃるとおりですよ』と納得
するよりないけど……。支店を出すというのは、ど
う考えてもムリでしょう」

と、彼は言った。

「そうかな。もともと、ここにいる者全員、鉄道に乗るのが、趣味みたいな人間だから、日本全域に展開するのは、そう難しくないはずだし……」

江戸川がそう言うのと、美也子は風邪気味の口をハシカチでおさえて、

「私、尾瀬さんの考えに賛成ですわ。まず、この横浜に根をおろしてから、先のことをよく考えてみるのがいいと思いますわ。ね、明美ちゃん、どう思う？」

と、妹に話をふった。

明美は、小首を曲げて、

「探偵長のお話は、なんとなく雄大だし、チャンスさえあれば、すぐにものついでいいかもしれない」

と、自分の意見を言った。

2

さすがの明美も、そうは言ったものの、まさか、自分の言うチャンスが、すぐに現実になろうとは、まったく予期していなかった。

ハート探偵局の来客を知らせるチャイムが鳴った。自動的に、来訪者の顔は、会議室中央のスクリーンに映し出された。

「おっと。男性二人がお出ました。かなり大きな仕事かもしれない」

江戸川はすぐに言った。

「接客室にお通しします。私が……」

と、美也子が席を立った。

接客室といっても、中央にテーブルと椅子四脚、あとはポップアップチェア四脚があるだけのものだ

った。

ほんの少しの時間が経って、美也子と明美が注れたコーヒ―を挟み、江戸川と尾瀬は、来客と向き合っていた。

来客の出した名刺には、〈関西探偵局 局長

佐々原一夫〉〈関西探偵局 調査主任 久藤光春〉とあった。

佐々原という男は、やや禿げあがった額、そして、太く黒い眉の二つが人相の特徴だった。それに対して、久藤は青年という言葉がピッタリ似合う理性的なタイプで、江戸川はすごく気に入った。

挨拶のあとは佐々原が、ほとんど一人で喋りまくった。

「いやあ、お伺いした用件というのは、これから順々にお話ししますが、私は、十年ほど前まで、この横浜の金沢区に住んでいましたね。ですから、非

常にこちらに親しみを感じます。本題にはいる前に、どうしてもお話ししておきたいのですが、こちらの井筒さん……以前、オーナーをされていた頃、私は四国に引っ込んだばかりでして、その頃、いろいろ、ご教示いただいたものです」

「ああ、井筒さんのこと、ご存知でしたか」

江戸川は、思わず胸襟きょうしんを開く気持になった。

「実に素晴らしい人でした。あのかた、今はどうされていきますか？」

「実はある事件以来、行方不明になったままです」

「え、それは驚きました。いずれ……こころ探偵事務所と私どもと、お互いの探偵局を全国的なものにしたいと、おっしゃってくださったのですよ」

佐々原の言葉は、ついさつき、江戸川が局員に話した内容に通じるものがあった。

江戸川はニッコリした。

「そうですか。それは存じませんでした。井筒さんは先を見通せる人でしてね。いろいろな事実や現象を、確実につかんでいました。たとえば……これは、井筒さんの遺した日記の記録でわかったのです。……多分、あなたもお聞きになったことがあるでしょう。ホラ、火牙陰鬼の事件です。警察などのおえない犯罪者を、始末することで、一時、有名になった火牙陰鬼の正体、あれも、ちゃんとつかんでいたことがわかりました」

「おお……聞いたことはありませんよ。その正体というのはなんでした？」

佐々原は興味深そうに江戸川のほうに、身をのり出すようにした。

「ご本人が口にしなかったので、詳しい話はいたしません。……あの大本の人物は、日本のヘレン・ケラーといわれて、先日、アメリカで亡くなった女

性だったそうです。実際、協力者が大勢いたので、始末人、火牙陰鬼を立ちあげることができたんですよ。一時、南軽井沢のうちの事務所の隣におりましてね。協力者には、有名な芸術家……画家中心で、もの書きもいたようです。ですから、画家のアップサイドダウン、つまりひっくり返しが火牙、陰鬼はインキだと、井筒さんは推理していたよう……。ま、こんなことは余談です。それより、まだ、本題の用件を伺っていませんでした」

江戸川が言うと、佐々原は笑った。

「これは失礼しました。その前に、私のほうの職員構成を話しておきます。そうしませんと、関西探偵局の実体をおわかりいただけないと思いますから……。ここにいる二人のほかには、女性二人がおります」

「それでは、うちと同じ四人ですか、全員で……」

と、尾瀬が念押しをした。

「そうなりますか。望月もちづきしのぶしのぶというのは、私どもの一級調査員で、もう一人の峯山みねやまゆみこ弓子ゆみこの方は二級調査員です」

佐々原が説明した。

「女性を、一級二級とランク付けしているんですか？」

江戸川が訊いた。

「そうなんです。そうしないと、事故を起こしたときに、損害賠償に応じるとき、余計に支払うことになるでしょう。一級というのは、すべてに責任をもつ局員です。しかし、峯山の方は、視力が悪くて、いまだに、運転免許を取っていないし……つまり、車の運転ができない。ですから、依頼者に、峯山の場合は、二級であることを承知の上、使ってもらわうわけです」

佐々原のこの言葉に、

「それは驚きましたな。探偵局の人間で、車の運転ができないようでは、役立たずと言ったら失礼かもしれないが、どうも……」

と、江戸川は呟くように言った。

「おっしゃるとおりです。ですから、目下のところ、一級の職員を一人、新規採用する予定はありません。

いずれにしても、今回お願いするケースでは、二級でも使えますので、改善はそのあとで……」

佐々原は、すまなそうだった。

横にいる久藤は、鋭い視線を、江戸川の方に向けていた。

〈この男は、なかなか、やりそうだな……〉

江戸川は直感した。

「さて……では、そろそろ本題の方を、どうぞ」

と、江戸川は言った。

佐々原は頷いた。

「実は、こちらの横浜市西区に、松平不動産という

……職員が十名程度の小会社があるんです。この会社の社長は、松平康平といまして、出身は高松の栗林公園りっりん近くなんです……今回、この会社で、旅行の企画があるというのです。世の中は不況なのに、建売住宅の販売がうまくいって、業績がのびた。そこで社員への褒賞を兼ねた記念旅行をするということです。ま、ここまでは、あっても当然ということでしょうけど、実は、社内は小さいながら、人間関係のゴタゴタがあって、『業績をのばしたのはおれだ』

とか、『旅行じゃなくて現金なまがいい』とか、騒さわぎになった。それを抑えて、四国八十八ヶ所巡りの一部をしつつ、観光旅行をしたい、と松平社長は、私のところへ連絡して来た、というわけです」

佐々原は、ざっと松平不動産の実情を語った。

「しかし……旅行へ行くというのに、どうして探偵社が動く必要があるんですか？」

と、江戸川は訊いた。

「お尋ねは、ごもつともです。松平社長という人のパーソナリティをご説明しないとわからないと思いますが、この人は、〈夢見占い〉というか、夢を非常に大切にするんですよ、昔から……」

と、佐々原が言った。

「松平社長とは、同郷ですか、佐々原さんは……」
江戸川が尋ねた。

「ええ、まあ……そういうこともあって、松平さん